

タイ王国 Wat Ratchasitharam 所蔵の

クメール文字パリー語貝葉写本について

清 水 洋 平

一、はじめに

東南アジア大陸部で長らく書写され、伝承されてきた仏典の貝葉写本や折本紙写本は、現在、各地に離散して寺院の経蔵に無造作に保管されているものが多くあり、所在やその内容が不詳のものが多い。また、所蔵環境も良くないことから、隠滅の危機に瀕しているものも多い。この状態を危惧する研究者並びに研究機関がその調査・収集、或いはカタログの作成に努力している。

一方、大谷大学には、今から百年余り前、タイ王室寄贈とされるパリー語貝葉写本（大谷貝葉と略称）のコレクションが所蔵されている。その所蔵量は国内最大級であり、内外に誇る一大コレクションである。これら大谷貝葉を活用した研究も十年以上に亘り継続的になされてきた。

そのうち、タイ王室寺院 Wat Phra Chetuphon Vimonmangklararm（通称ワット・ポー）の Phra Suthitram-manuwat (Ven. Dr. Thiao Malai) 長老（マハーチュラーロンコーン大学仏教学部長）が、バンコク及びその周辺地域の歴

史の古い寺院が所蔵する文献遺産をデジタル化する提言をなされ、我々日本人仏教研究者にその作業を寄託したい旨の提案があった。

我々は、自主団体「東南アジア文献遺産日本保存会」を二〇〇七年十二月に設立し、バンコク地域の古刹の中でも、貝葉写本の所蔵量が最大級であり、手付かずのまま残されているとされる寺院 Wat Ratchasitharam の秘蔵写本の調査を開始した。

二、調査実施の概要

二〇〇八年十一月四日から十二月二十二日に至る約二ヶ月間、二〇〇九年三月二日から三月三十日に至る約一ヶ月間の計二回、タイ王国バンコクのトンブリー地区⁽¹⁾ (Bangkokyai 区) に所在する寺院 Wat Ratchasitharam を訪ね、所蔵する貝葉写本の調査を行った。

Wat Ratchasitharam は、現在のチャクリー (ラタナーコーシン) 朝の祖ラーマ一世 (在位一七八二～一八〇九) チュラーローク王) によって復興され、アユタヤー朝 (一三五二～一七六七) 最後のサンガ・ラージャ・Somdet phrasang-kharat Yannasangwon (Phra Archan Suk) が招聘された歴史をもつ寺院である。かつて Wat Phlap という名の古い寺院があった場所に所在する。

後に、ラーマ二世 (在位一八〇九～一八二四) ナバライ王)、ラーマ三世 (在位一八二四～一八五一) ナンクヲオ王) の治世に、Wat Ratchasitharam と寺院名が変えられる。ラーマ二世、ラーマ三世、ラーマ四世 (在位一八五一～一八六八) チョームクヲオ (モンクット) 王) が仏教徒としての修行と瞑想を学んだ由緒ある寺院としても知られている。現在は第二級の王室寺院⁽²⁾ である (Fig. 1)。

我々の調査対象は、同寺院内の二カ所にある二十一基の厨子のうち、合計十四基の厨子に収蔵されていた貝葉写本



Fig. 1: Wat Ratchasittharam 外観



Fig. 3: 整理前の厨子



Fig. 2: 貝葉写本が収められている厨子

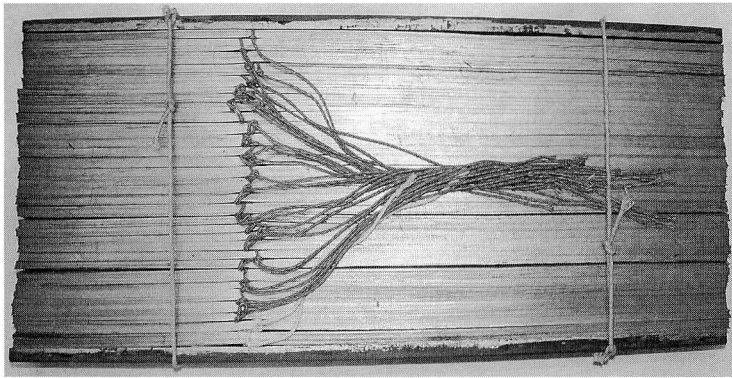


Fig. 4: 多くのプーク（束）で構成された貝葉写本集成

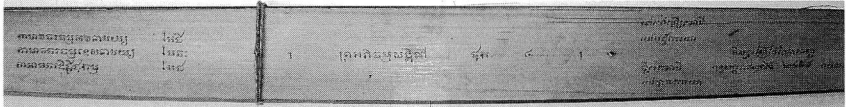


Fig. 5: クメール文字で貝葉に記された章題・題名・プーク番号・筆写された年号



Fig. 6: 作業場での調査・整理作業

である (Fig. 23)。作業は、それら厨子内の貝葉写本を、寺院側が提供の作業場へ運び入れることで開始した。まず、布で梱包されているものは、その梱包を解き (Fig. 24)、経典名の記された木や象牙で作られたネームタグの有無を確認する。次に、貝葉に記されている文献のタイトルをプーク (Puk) 束) ごとに確認しながら順番を揃え、年号の記述の有無も確認する (Fig. 25)。その後、文献のタイトルもしくは区切りを探し、見出した最初の数行および最後の数行をローマ字転写し読解する。加えて文献の保存状態も記録する (以下同様の作業を繰り返してゆく)。また、プークの紐や套を梱包する紐、布が破損している場合は取り替え、プークと集成 (套) に番号を付し、元通りに梱包する (Fig. 26)。全ての貝葉写本についての調査を終えた後、寺院側の協力のもと、それらの貝葉写本全てを作業場から厨子に再び納め直し、厨子に番号を付して施錠をすることで完結する。

三、所蔵写本全体の特徴

貝葉写本に書かれている文字は、殆どがクメール文字表記の写本であり、僅かが現代タイ文字の写本である。クメール文字表記写本の言語には、パリリ語で書かれているものと、パリリ語とタイ語が混在しているものに分かれる。今回、我々の調査対象はクメール文字表記の写本のみであり、現代タイ文字のものは調査の対象外である。貝葉写本の大きさは、二つ穴の長いタイプ (横約50cm×幅約30cm) が大部分だが、一つ穴の短いタイプ (横約30cm×幅約30cm) も一部ある⁽³⁾。行数は、殆どのものが五行で書かれており、稀に三行で書かれているものもある。

これらの中には筆写された年号が表題の横などに記される場合がある。今回調査した貝葉写本に記される年号のうち、最も古い年号は仏暦二二一九年 (西暦一七七六年) であり、*Srasangtha* の中に記されている。それに次ぐ古い年号は仏暦二二二四年 (西暦一七八一年) で *Dhammapada* に記されている。アユタヤー王朝を滅ぼしたビルマ軍を追いやってタクシン王がトンブリー王朝を開いたのが一七八八年であり、現在のラタナーコーシン王朝をラーマ一世が開

いたのは一七八二年であることから、上記の年代は、ともにトンブリー王朝の時代である。今回調査した寺院が、トンブリー王朝の都であるトンブリー地区にあることから考えて、その時代の写本が現存していることが理解できる。

今回の調査において、約六七〇套の貝葉写本から成る約一二〇〇のタイトル（一部重複するものあり）のカタログを作成している。この所蔵写本の大部分を占める内容は、以下に示す Abhidhamma 七論、*Dhammapada* に関する文献、*Kaccāyana* 等の文法書、*Vessantara-jātaka* の四種類である。

① Abhidhamma 七論

Abhidhamma 七論の集成は、*Dhammasaṅgani*, *Vibhanga*, *Dhātukatha*, *Puggalapañatti*, *Kaṭṭhāvatthu*, *Yamaka*, *Paṭiṭṭhāna* の七種類の各論書の要約版がこの順番で一套にまとめられている⁽⁴⁾。内容への言及は避けるが、今回調査した貝葉写本には、筆記の特徴として次のような点が見受けられた。Abhidhamma 七論が記される貝葉写本は、クメール文字で表記されているが、パーリ語のみで書かれているものとパーリ語とタイ語との混淆した形式で書かれているものとの二種類がある。このうちパーリ語のみで書かれているものは、その集成の最初に記される論書のタイトルが全て '*Dhammasaṅgani*' とされるが、パーリ語とタイ語との混淆した形式のものは、全て '*Abhidhammasaṅgani*' と表記されている。これは、おそらく最初のタイトルを一見ただけで、その七論要約の集成がパーリ語で書かれているものか、或いはパーリ語とタイ語との混淆した形式で書かれているものかを見分けるために、意図的に書き分けられていると思われる。

② *Dhammapada* に関する文献

Khuddakavagga 中の經典 *Dhammapada* 及びその註釈書 *Dhammapadapaṭiṭhakkathā* を指す。*Dhammapada* が記され

た集成は、第八章 (aṭṭhama vagga) までが書かれた前半部分を一つの集成とし、それ以降の後半部分が書かれたものを別の一つの集成として存在していた。前半部分が書かれた集成は、殆どがブーク一〜二〇から構成されており 'bra dhammapada pnatā' としてタイトルが記されている⁽⁶⁾。後半部分が書かれた集成は、こちらもブーク一〜二〇から構成されており 'bra dhammapada pnapāyā' としてタイトルが記されている⁽⁷⁾。Dhammapadāṭṭhakaṭṭhā は 'bra dhammapadāṭṭhakaṭṭhā kambujāksaranvāta' というタイトルのもと、ブーク一〜二〇から構成される前半部分の集成が現存し、後半部分の集成も数多く現存していた。

③ Kaccāyana 等の文法書

Kaccāyana 等の文法書類とは、インドのパーリ文法家 Kaccāyana⁽⁸⁾ に帰せられる一連のパーリ文法書群のことである。G.P. Malasekera によれば Kaccāyana はサンスクリット文法、特に Kāraṇtra の影響を受けてパーリ語の文法をまとめた指摘している。

そのような Kaccāyana に帰せられる文法書が数多く収蔵されているのであるが、タイトルの異なる複数のブークで構成される様々な集成(套)が存在している。その種類は極めて多く、集成ごとに何らかの意図をもってまとめられていると思われる。ただ、Kaccāyana の文法書がタイの貝葉写本のうちに多く存在することについては、ある理由が考えられる。それは、十五世紀後半にタイ北部チェンマイで活躍したと考えられるパーリ文法家 Nānakitti の存在である。Nānakitti は、文法書 'Vinaya' Abhidhamma 七論などのうち、それらの難解な箇所についてタイ人に理解しやすいようにまとめた 'Yojanā' という名称が付される一連の文献 'Yojanā mūlakaccāyana, Yojanā pathama samantapāsāṭhikā, Yojanā samāsa' 等を編纂し、北タイ地域にパーリ文法を根付かせ、パーリ仏教の興隆に貢献した人物である。従って、おそらく Nānakitti が懸け橋となり、タイ北部の周辺地域にも Kaccāyana に帰せられる文法書の

れていた事実を考え合わせると、タイの出家者が学ぶべき主要な項目でもあったことが窺える。

四、特徴的な写本⁽¹¹⁾

Wat Ratchasitharam 所蔵の貝葉写本の中で目を引くもう一つの特徴は、タイを中心とする東南アジア大陸部に独自に流布したと考えられる文献が数多く存在することである。これらは、タイ国並びに南伝上座仏教が伝播した各地の、仏教受容の在り方や地域の独自性と仏教との融合を考える上で研究価値が高い。以下に、その幾つかを紹介する。

① Jātaka 文献類

Paññāsa (五〇) *-jātaka* と呼ばれる東南アジア独自に展開したジャータカが挙げられる。これは The Pali Text Society (PTS) から出版されているインド起源の五〇〇ジャータカとは異なり、東南アジア地域に伝承されてきた物語が数多く仏教的に翻案されジャータカとして五〇話分まとめられたものである。

その他、五〇〇ジャータカや *Paññāsa-jātaka* に所収されていないと考えられる未知なるジャータカも散見できる。例えば *Namaparāṇi-jātaka* や *Badhira-jātaka* と題されるもの、*Candaghaṭṭasuriyaghaṭṭa-jātaka* や *Suṇammasambharāṇi-jātaka* と題されるもの等が挙げられる。

② 'Guna' と表記される文献群

Mahābuddhaguna と題される一ブークからなる集成の文献が存在する。'mahābuddhaguna' とは「偉大な仏徳」即ち「仏に具わった徳質（特徴）」のことであり、仏を指す異名である。南伝仏教における仏の異名は、北伝仏教に

おける仏の異名(所謂、仏の十号)のうち、「如来」の語を除いたものと一致し、「仏の九徳」と呼ばれている。この九つの名は、*Visuddhimagga* (『清浄道論』)の第七品・仏随念に説明されている。しかし、現在までの仮調査で、タイ伝承写本の当該パーリ語文章は、上記 *Visuddhimagga* (『清浄道論』)の当該箇所のパーリ語文章とは明らかに異なっていることが判明している。更には、ビルマ伝承で説明される「仏の九徳」の内容とも異なっていることも明らかになっている。よって、タイ伝承文献では、仏の徳をどのように理解し、どのような形で称賛していたのかを明確に知る上でも研究価値の高い文献と考えられる。

③ ‘*Āṇisaṃsa*’ と表記される文献群

仏教は、功徳を積むことが徳目の一つとして重視される。タイ仏教では、特に功徳を積むことは「タンブン」(‘*ṭham bun*’)⁽¹³⁾ と呼ばれ、強調されている。実際にタイを訪れると在家者が熱心に寺院や僧侶に布施を行い多くの功徳を積んでいる現実がよく見受けられる。しかし、タイ仏教において、このように積徳行が著しく強調されることについては、これまで文献的な裏づけに基づく仏教学の立場からの研究はあまりされてこなかった。今回の調査で、その研究の一助になると考えられる文献が多く見出された。功果(御利益)を意味する、‘*āṇisaṃsa*’ という名称が題名に付く文献である。衣を布施する功果を説く *Kathinadānaṇisaṃsa* や三蔵を写する功果を説く *Tepijāka līhāṇisaṃsa*、功徳と功果(御利益)の根拠を經典やジャータカに求めた *Suttajātakaṇidānaṇisaṃsa* など、様々に見られるのである。

④ *Kammathāna* 文献

今回の調査対象である Wat Ratchasitharam は、タイ仏教の中でも瞑想寺院としても有名である。現在のラタナーコーシン王朝のラーマ九世(在位一九四六～プミポン王)をはじめ多くの国王が王位を継承する以前、同寺院で

仏法を学び瞑想の実践を行ったのである。そのため、瞑想のテキストとして *Kammattihāna* (業処) と呼ばれる文献が現存しており、同寺院はこれを誇りにしている。*Kammattihāna* には、*Vipassanābhikkhūti* (観想業処) と *Samādhi-kammattihāna* (三昧業処) の二種類があり、瞑想の方法が段階的に記されている。

⑤ その他

上記以外にも、釈尊の生涯の物語にタイ独自の部分を付加させた *Paṭhamasambodhi* や、釈尊の父親 *Suddhodana* (浄飯王) に視点を当てた *Pitugunda*、アーナンダの涅槃の物語 *Anandaparivāṇakathā* やマハー・カッサパ長老の涅槃の物語 *Mahā Kassapatheranibhāna*、ガウアンパティ長老の涅槃の物語である *Gaṇampatheranibhāna* を記した写本などが存在する。そして、八十大弟子それぞれの涅槃を題材にしてまとめられた *Astīmahāsaṅgavāṇanibhāna* 四念処から八聖道までの三十七菩提分法を説く *Bodhipakkhiyadhammā*、三界についての話である *Trailokavinnicheyyakathā*、三界を巡る話としてタイ国でよく知られた *Phra Malai* 長老の物語である *Maleyyasutta*、結界について記された *Sīmanniccheyya*、弥勒菩薩を初めとする未来十仏の話である *Anāgataṅgasa*、十菩薩の話を扱った *Dasabodhisatta*、文法書の一種である *Balappabodhā*、仏の善行の果報が説かれた *Sambhāravipāka*、*Abhidhammathasāṅgaha* についての新しい *ṭīkā* である *Manisāramāṇiṣā*、メントラの一種が記された *Vajrasāra*、地獄を初めとする四悪処の様子とそこに生れた因縁が描かれる *Mahāvīpāka*、仏の過去の行ないが描かれる *Buddhāvīpāka*、バンコクにあるエメラルド寺院 (Wat Phra Keo: 王宮寺院) にあるエメラルド仏の由来が描かれる *Ratanabimbavamsa*、仏典の第一結集 (*paṭhama saṅgāya nāya*) から第五結集 (*pañcama saṅgāya nāya*) の事蹟がそれぞれに記された貝葉写本なども現存する。また、ビルマで作成された *Jambūpāṭisutta* や *Vatthodaya ṭīkā*、*Yasobhivadāhanapāṭiṭhā*、スリランカで作成された *Madhurasavāṇiṇi*、チェンマイまたはラオスで作成された *Māṅgalsutta* の注釈文献である

Mangaladipani ⁽²⁰⁾なども貝葉写本として所蔵されている。

五、まとめ

我々は今回の調査の過程で、上記四で述べた蔵外文献を中心に、貝葉写本のデジタル写真撮影を行っている。今後、これらの得られた資料をもとに各文献の研究が順次進められていくが、改めて大谷貝葉を捉え直してみると、多くの共通する蔵外文献の写本が所蔵されている。例えば、*Pannāsa-jātaka*, *Candaghaṭṭa-jātaka*, *Mahabuddhagunamanāra-atihakatha*, *Tvāṭṭikyaṇṇicchaya-niryāṭṭha*, *Anagataṇṇa*, *Jambūpāṇi-sūta*, *Bodhipakkhiya-dhamma*, *Mangaladipani* であり、*gūṇa* や *anisaṇsa* という名称が題名に付く複数の文献も存在する。更には大谷貝葉コレクションの中に見られない文献名も数多く見出されるのである。

今回の調査で得られた目録や写本のデータベースをもとに、大谷貝葉や他寺院所蔵の貝葉写本文献との対校・校訂が進み、更には東南アジア各地に伝承されたものや伝統的なパリー聖典との内容の比較研究が進めば、仏教研究の中でも手薄になっている東南アジア撰述の仏教文献写本の研究並びに東南アジアの仏教思想研究が大いに進展すると考えられる。

註

- (1) チャオプラヤー川の西岸に広がる地域で、現在のチャクリー王朝がバンコクに遷都する以前の1767年から1782年にかけて、タクシン王により都が置かれていた。
- (2) 王室寺院とは、王室のメンバーが建てた寺院、王室のメンバーに寄進するために建てられた寺院、および一般人の建てた寺院で王室の認定を受けた寺院のこと。
- (3) 短いタイプの貝葉写本には、*‘pāṇinokkha’* (波羅提木叉) や *‘paritta’* (護呪) に関するタイトルの付されたものが多く見

受けられた。

(4) 套によつてはこのうちの幾つかが欠けているものもあるが、このように Abhidhamma 七論の要約したものを一つの集成としてまとめられるものについては、その集成自体に「Abhidhamma 七論要約」を意味する題名が付されているわけではなく、殆どは個々の論書のタイトルがブークごとに記されているのみである。ただ、稀に「Abhidhamma 七論要約」を意味する 'satta paramarthabhidhammatha sahkepa katha' という題名が付されたものが存在する。

(5) 「パーリ語とタイ語との混淆した形式」とは、クメール文字で記されたタイ語がベースとなっている文章であり、その中にパーリ語の単語が散見される。

(6) タイ語で「前半部分」を意味する 'ban ton' と発音される文字が貝葉写本にクメール文字で記されており、我々は作業行程上、クメール文字の表記通りに 'pantha' 等と仮にローマ字転写をしている。

(7) タイ語で「後半部分」を意味する 'ban plai' と発音される文字が貝葉写本にクメール文字で記されており、我々は作業行程上、クメール文字の表記通りに 'panplāya' 等と仮にローマ字転写をしている。

(8) Kaccāyana の活動年代は、五〜七世紀、一〇世紀前後など様々な説があり未だ確定されていない。

(9) 調査対象寺院に限定されることではないが、チェンマイで作成されたと考えられる文献が同寺院の写本に多い理由として次の二つの可能性が考えられる。(1) チェンマイは一四〜一五世紀頃、仏教の「黄金時代」を迎えていたようである。その影響は、おそらく周辺の仏教を信仰する地域にも波及したと考えられる。(2) トンプリー及びラタナーコーシン朝のタイが、チェンマイを含む北タイ地域に伝わる仏教文献を、自らの首都であるトンプリー及びバンコクの各寺院において貝葉写本に筆写させた歴史的事実もある。

(10) *Tenriya-jātaka* (1phūk), *Mahajānaka-jātaka* (1phūk), *Sucanijāsana-jātaka* (1phūk), *Nimi(nemi)raja-jātaka* (1phūk), *Bhūridatta-jātaka* (2phūk), *Candakumara-jātaka* (1phūk), *Brahmanarada-jātaka* (1phūk), *Vāhuvapandita-jātaka* (2phūk), *Mahosatha-jātaka* (5phūk) での一つの集成が構成されているものが多い。

(11) 一応、「特徴的な写本」と題した。しかし、内容的に詳細な考察がまだ殆どなされていない現段階では、既存經典のパラフレーズである可能性もあり、独自の文献と指摘したものではない。今後、説明が進むにつれて明らかにしていきたい。

(12) 「五〇〇ジャータカ」という題名は貝葉写本には存在しない。そのうちの第一集を意味する *Ekanipāta-jātaka* と題され一

つの集成としてまとめられている写本などが現存する。その他、個々のジャータカ名が記されたものや、*Cincchāṇṇikā sundarī paduma jāṭaka* (*Jāṭaka*, no.472; *Mahāpaduma-jāṭaka* の別名) 等のように、個々のジャータカの別名が記された写本なども現存する。

- (13) ‘bun’ はパーリ語の ‘puṇṇa’ (福德) に還元できるが、‘ham’ はタイ語の動詞であり、「行う」や「積む」という意味である。
 - (14) *Paṭhamasambodhi* は J. Filiozat 女史が整理して George Coedès (2003) 編で PTS から出版されている。ただ、所蔵写本に記されている章題やブック番号を見ると、新たなヴァージョンが存在する可能性を指摘できる。例えば *brahmajjhesanā* や *‘yasa pabbajjā’* という章題は、PTS 版とは異なる箇所で見られる。また、写本に見られる *‘sammāsambuddhikicca kathā’* という章題は PTS 版には見られなく。
 - (15) *Samyuttanikāya*. V. 48: 61-70 (pp. 236-239) に同じような題名 *‘Bodhipakkhiyavagga’* があるが、写本の章題が明らかに異なるため、同一のものとは考えにくく。
 - (16) 一四二偈より成る全韻文のテキストとされる。
 - (17) 「結集」の表記が *‘saṅgāya’* でなく *‘saṅgīti’* と記された写本も存在する。
 - (18) *gāthā* の韻律に関する文献であり、*Vuttodaya* はスリランカで作成され、*Ṭika* はビルマで作成されたとされる。
 - (19) ビルマに流布する称誉増大の物語と思われる。
 - (20) *Māṅgaladīpani* は、チェンマイもしくはラオスで活動したとされる *‘Acaṅṅa siri māṅgala’* によって一五二四年に新しく作られた *Māṅgalasūta* の註釈である。*Māṅgaladīpani* は、写本では四三ブックから成り、*‘māṅgaladīpani aṭṭhakathā māṅgalasūta’* という題名であるが、ブックによつては新しい註釈という意味の *‘… navatthakathā …’* とされるものもある。
- * 本稿は、日本学術振興会科学研究費（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。また、本調査は、東南アジア文献遺産日本保存会からの人的援助（田邊和子博士（東方研究会研究員）、舟橋智哉氏（大谷大学大学院博士後期課程修了）の協力）並びに資金援助も受けて実施された。明記して謝意を表します。